

会報

みちびき

令和元年7月
第131号
東京都公立学校
情緒障害
教育研究会

制度導入の諸課題に対応する研修の充実

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

国立市立国立第二小学校長 小林理人



◇制度の導入に伴う諸課題

都内全ての公立小学校において「特別支援教室」が設置され、教員が巡回して行う指導が全面的に実施されました。また、中学校においても完全実施に向けての準備が始まり、令和三年度には発達障害のある児童・生徒に対する九年間の連続した指導・支援体制が整うこととなります。

しかし、昨年度、本会が実施した実態調査や、十一月に行われた都情研セミナーでは制度導入の成果とともに、いくつかの課題があることが報告されました。

その課題を整理すると次のようになります。

○特別支援教室に対するニーズが予想以上に高く、指導が必要な児童に十分な対応ができない。

○指導に当たる教員の経験が少なく、多様化する児童の実態に対応できない。また、それに対応

するための専門的な研修を受ける機会が得にくい状況がある。○地区による実態の違いから、特別支援教室の運用方法が異なり、異動後の対応が難しい。等

さらに、中学校においても先行実施をしている地区からは、中学校特有の教科免許の問題や、部活指導に伴う校務分掌の問題等が指摘されています。そして、これまで発達障害等が原因で不登校となつた生徒の居場所となつている適応指導教室との連携・協力等も課題となることが予想されます。

また、昨年度、東京都教育委員会は、この制度の円滑な導入を図るために作成した「特別支援教室の導入ガイドライン・小学校版」の見直しを行いました。そして、退級に向けて指導目標を明確にすることや、在籍学級において合理的な配慮に基づく環境を整備し、

本誌二ページ〜六ページ

平成三十一年度都情研定期総会記念講演（抄録）

「特別支援教室に期待すること」

〜医療の立場から見えるものを通して〜

（むさしの小児発達クリニック 川崎 葉子先生）を掲載しています。

経過観察期間を設けて指導の必要性等を吟味することなどを新たに示しました。

これにより、特別支援教室での指導・支援を必要とする児童像が明確になるとともに、より意図的・計画的な指導・支援が求められます。

◇都情研に期待される役割

このような、東京都の自閉症・情緒障害教育における指導・支援体制の大きな改革期を迎え、本会では経験の少ない先生方を対象とした基礎研修や、専門性の高い講師を招聘した専門研修等を開催し、全都から熱心に指導に当たっているたくさんの先生方の参加を得ました。研修の企画や準備、運営のために時間と労を惜しまずに関わっていただいた本会の委員の皆さんに心から敬意を表するとともに、感謝いたします。

今後、山積する特別支援教室の円滑な実施に伴う諸課題に対応し、子供の成長に関わる教員のスキルアップや、関係者の行動連携の「質」を高めることが一層求め

られることとなります。そして、そのことを目的とし活動する本会の存在と役割は益々大きくなります。

以上のことを肝に銘じ、これまでも本会が築いた組織と子供の幸福を願う本会の「魂」を基盤とし、会員の先生方が「参加してよかつた」と実感できるような研究・研修会を企画・運営していきます。そして、全ての子供たちが安心して自分らしさを発揮し、生きる力の源となる夢や希望をもつことができる教室、学校の実現をめざして本会の務めを果たしていきます。

都情研会報誌「みちびき」は、情緒障害教育等に関する情報を広く教員の皆様にお知らせする会報誌です。通常学級担任の皆様にもコピーして配布していただけますようお願いいたします。

（広報担当）

平成三十一年度都情研定期総会記念講演（抄録） 「特別支援教育に期待すること」

医療の立場から見えるものを通して」

むさしの小児発達クリニック

川崎 葉子先生

講演は、WISCと境界知能例の子供たちの教育処遇や就労について分かりやすくお話ししていただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ず、誠に残念です。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。（広報担当

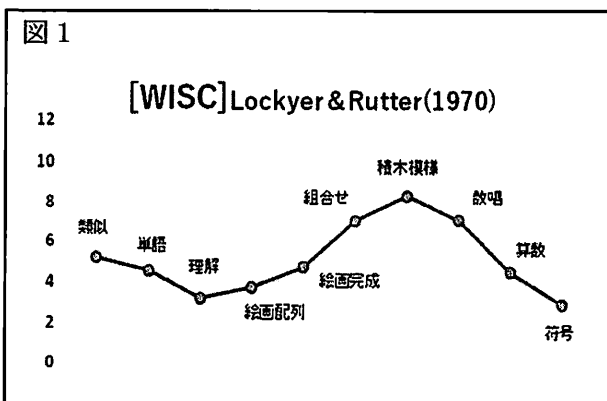
一 WISCを知る

まず、一つ目のテーマ、WISCについてです。WISCを調べようと思っただきつかけは、自閉スペクトラム症（以下ASDとします）では、一回目の結果と二回目の結果が大きく違ってくる場合があることにびっくりしたことで、一回目に言語が苦手です、というはずが、二回目には言語が得意です、となることさえある。WISCはどう活用したら、子供の適切な評価になるのかとの疑問からです。この調査で分かったことを皆さんにお伝えしたいと思います。

ASDは疫学調査が開始された一九六六年頃には一万人に四〜五人でした。ところが、どんどん有病率が上昇し、二〇〇九年頃はアメリカの資料では五十九人に一人という数字も出て来て、百倍近くとなってきました。

ASDの認知仮説、ASDは何が問題で特性が出てくるのかについては三つの代表的な仮説があります。一つ目の「心の理論障害仮説」は、相手の気持ちが読み取れないことで、コミュニケーションがうまくいかない、社会性が順調に育っていかない、という仮説、二つ目の「弱い中枢統合仮説」は、部分がよく見えるけれど全体として見ることが苦手なために適切に行動できないというもの、三つ目の「実行機能障害仮説」は、「問題解決能力」とも称され、目的に到達するためプランを立てる、柔軟に試行錯誤できる、行動を抑制できる、ワーキングメモリーなどの実行機能とされる力がうまく働かないというものです。

認知検査の代表はWISCです。



WISCは改訂を重ね、最初がWISC、次がWISC-R (WISCの改訂版)、WISC-III、IV、そして外国ではWISC-Vとなつてきていますが、日本では今はWISC-IVが使われています。WISCの研究を最初に行ったうちの一人が、ラターというASDの領域で最長老の研究者です。このラターの一九七〇年に報告した結果をグラフにしたのが図1です。「類似」や「単語」、「理解」が言語に関する検査項目になっていきます。その他に、「絵画配列」「絵画完成」「組合せ」「積木模様」「数唱」「算数」「符号」といった検査項目で最初のWISCはできていました。そして、0、1、2、...10、11、12という評価点になっていて、よく解答出来るほど高い点

になります。

図1を見ると、言語に関する検査項目の点が低く、ラターがこのことに気が付いて発表しました。また、とても高い点が出ているのは積木模様、数唱だということも発表しました。この後、ラターは世界で通用する診断基準を発表します。その中でASDの本質は心因ではなく言語障害であるとし、それからは言語指導がもつぱら行われていました。

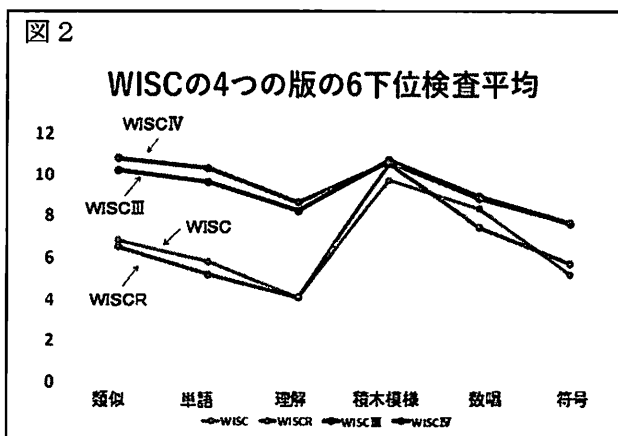
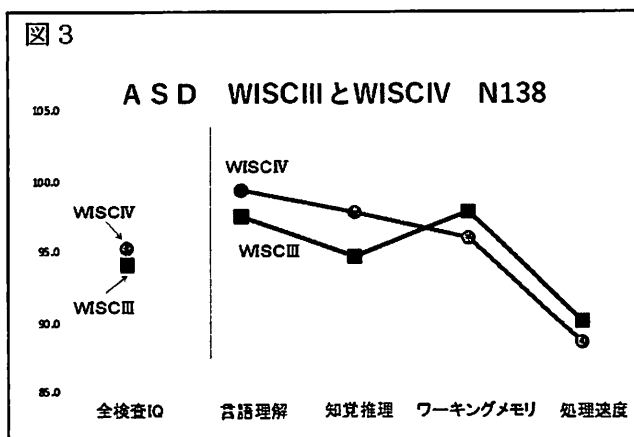


図2はWISC、WISC-R、WISC-III、WISC-IVの結果を折れ線グラフに表したものです。それぞれにいろいろな検査項目がありました。四つの検査に共通する検査項目は「類似」「単語」「理解」「積木模様」「数唱」「符号」の

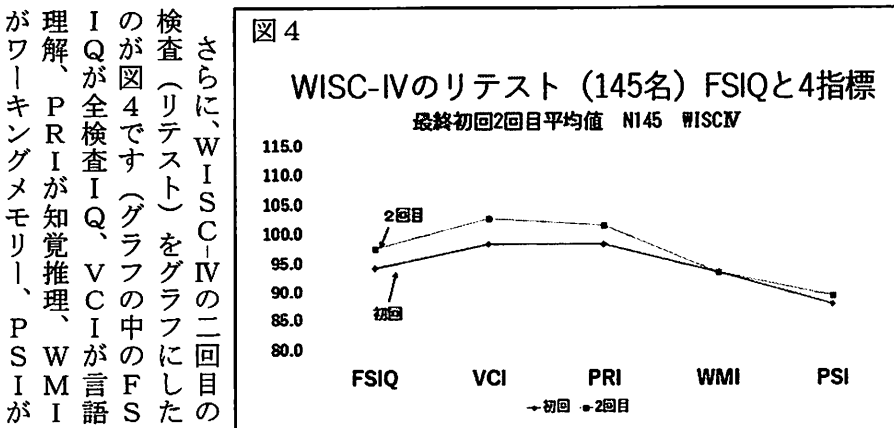
六つです。この図2を見ると、WISCとWISC-Rの言語に関する検査項目の点が低いことが分かります。ASDを言語障害と考えていたのはうなずけます。ところが、WISC-IIIやWISC-IVになると、言語に関する検査項目の点が上がってきています。ASDの見方は時代と共に変わってきているのです。ASDは、言語は低くないと分かったので、診断基準が変わって言語障害であるという診断基準がなくなり、コミュニケーションの障害があるとされました。このコミュニケーションの中には、言語的コミュニケーションも非言語的コミュニケーションも含まれます。場面や状況が読めないとか、社会的に苦手があるとかというところが注目され、SST(ソーシャルスキルトレーニング)が指導に入ってきました。そして、言語指導はだんだんに影が薄くなりました。

WISC-IVは、全検査IQ(全体のIQ)と、言語理解、知覚推理、ワーキングメモリー、処理速度という四つの指標があります。言語理解の中には「類似」「単語」「理解」「知識」という下位検査があり、知覚推理には「積木模様」「絵の概念」「行列推理」、ワーキングメモリーには「数唱」「語音整列」、処理速度には「符号」「記号探し」という下位検査があります。この四つの指標のうち、図3のW



ISC-IVグラフで見ると、言語理解と知覚推理が高く、ワーキングメモリーと処理速度が低いです。これがASDの特徴的なWISCのプロファイルです。このプロフィールは、先生方が入級審査などで見る最も多いプロフィールのパターンだと思います。もちろん、個々に個性があるので、みんなが同じパターンになるわけではありませんが、逆に言語理解が低いとか、処理速度が高いとか、様々なお子さんがいます。ですが、全体的に見ると、このプロフィールのようなパターンになっています。

認知検査の代表格であるWISCで最初に報告された、言語が低く、積木模様、数唱が高いというパターンはもはやASDの特徴で



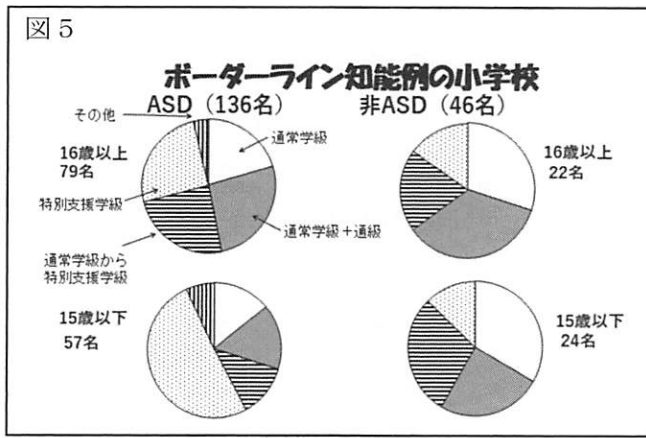
はなくなり、言語、知覚などの知的能力は相対的に高いが、ワーキングメモリーや処理速度などの実行機能が低いというのが特徴になってきているのです。これも教育指導方針を決めるときに基礎資料として、適切な特別支援教育をすることが求められます。

さらに、WISC-IVの二回目の検査(リテスト)をグラフにしたのが図4です(グラフの中のFSIQが全検査IQ、VCIが言語理解、PRIが知覚推理、WMIがワーキングメモリー、PSIが処理速度です)。一回目と二回目の検査をそれぞれの折れ線で表しています。一回目は就学相談時が多いです。二回目は期間を平均二〜

三年おいて検査した結果です。二回目の検査をしてみると、WISCの結果は上がってくるものが珍しくありません。定型発達のお子さんが検査を受けて一〇〇の値になるように作られているので、定型発達児では二回目の検査で結果が違ってくることは想定されていません。ところが、ASDの場合は、検査結果に変化が出て、上がってくることもあるのです。すると、就学相談のときの検査結果も参考にすべきなのですが、この結果が学年が上がったときに同じ結果にならない可能性があるということも念頭に置いて指導に当たることがあります。

二 境界級知能例の教育処遇と卒後調査
二つ目のテーマ、境界級知能例の教育処遇と卒後調査についてお話しします。境界級の子供たちはどういう教育支援が適しているのか、将来の社会適応をよくするためにということと調べました。対象はむさしの小児発達クリニックの受診例で、十歳以前にWISCないしは田中ビネーの結果が一時期IQ七〇から八十五の範疇にあった百八十二名です。平均が一〇〇ですから、七〇は下回らないけど八十五は上回らない人達を境界級またはボーダーラインと言います。この百八十二名のうちASDの方が百三十六名いました。(男子が百

八名、女子が二十八名。)対象としたのは、六歳から三十八歳。ASDではない人(非ASD)は、LDや運動能力障害、多動性障害、その他には診断名は付かないけれどボーダーラインの人がおられました。四十六名です。(男子三十六名、女子十名。)六歳から三十歳です。

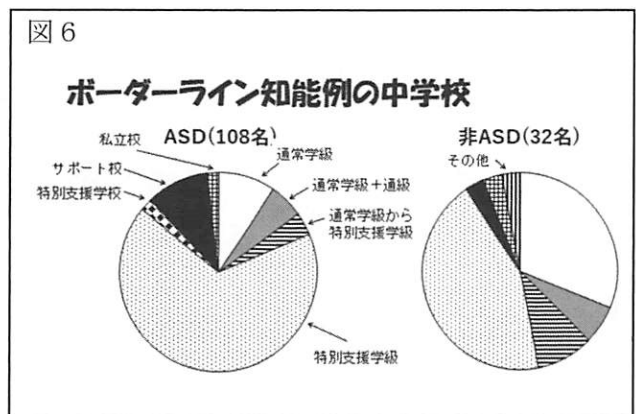


ボーダーライン知能例の小学校の円グラフ(図5)を見てください。小学校に関しては、二〇〇七年に特別支援教育制度というのが施行されました。知的に遅れのない子どもたちに柔軟な教育対応というのが趣旨と聞いています。ボーダーライン知能というのは知的遅れがあるかないかというところ

「ない」ということになります。就学相談の資料に知的遅れの有無という欄があり、そこに知的遅れ無し、と記入すると知的遅れを対象とした知的障害特別支援学級入級は不適となります。なので、特別支援教育制度のイメージは、通常学級での多様なサービスの提供だと認識していました。調査では制度施行以前に学校に入った人(調査時点で十六歳以上)と、それ以後特別支援教育制度施行後に小学校に入学した人(調査時点で十五歳以下)に分けて教育状況を見てみました。十五歳以下は八十一名、十六歳以上は百一名でした。十五歳以下は、ASDが五十七名、非ASDが二十四名。十六歳以上は、ASDが七十九名、非ASDが二十二名でした。円グラフの色分けは時計回りに、通常学級を利用した人、通常学級から特別支援学級に移った人、最初から特別支援学級だった人の順になっています。ボーダーライン知能例においては、ASDの方は通常学級での特別な支援のために発足したという特別支援教育制度後は、逆に特別支援学級在籍の方が増えたのです。「特別支援学級がよかった」とか「通常学級に行くべきだ」とかいう判断を申し上げようということでは決してありません。ボーダーラインのお子さんがどういう教育サービスを受けたら一番安心して伸び

て社会に出て行くのかということを考える参考資料になればとの思いからです。非ASDを見てみると、通常学級の方は十六歳以上も十五歳以下も同じくらいの数です。制度施行後、特別支援学級の人が増えたということはない。ASDの方はなかなか集団生活の中で難しさがあるから特別支援学級で丁寧に見てもらった方がよく、非ASDの方は学力的には難しくても友達関係などで良い学校生活を送れるということをこの数字は示しているのか、もしボーダーラインの子供たちを知的障害特別支援学級で指導することになれば、指導方針、指導内容は知的障害児向けのものでよいのかということも考えなければなりません。

さて、中学校の円グラフ(図6)を見てみます。中学校は、ASD百八名、非ASD三十二名。円グラフの色分けは時計回りに、通常学級、通常学級+通級、通常学級から特別支援学級に移った人、特別支援学級の人、特別支援学校の人、サポート校、私立校、その他という順になっています。小学校よりも特別支援学級に在籍の例が増えました。ASDでは三分の二と、最初から多くが特別支援学級に入学しました。非ASDでは半数が通常学級に入学し、一部は特別支援学級に転籍しました。少数は、特別支援学校を利用しました。



そして次は、高校の円グラフ(図7)を見てみます。特別支援学校利用が最多です。ASDでは三分の二に及び、非ASDでは半数です。特別支援学校のなかの普通科か就業技術科かで見ると、就業技術科はASDも非ASDも同数程度ですが、普通科はASDが多いです。一般校はASDよりも非ASDの方が多いです。そして、卒後の円グラフ(図8)を見てみます。愛の手帳や障害者保健福祉手帳を使って、障害者枠雇用をしている方が最多です。ASD、非ASD両群とも高校卒業後は六〇%以上が障害者枠での就労です。両群とも、一般就労の方はこれを調査した時点ではいませんでした。

図 8

ボーダーライン知能例の卒後

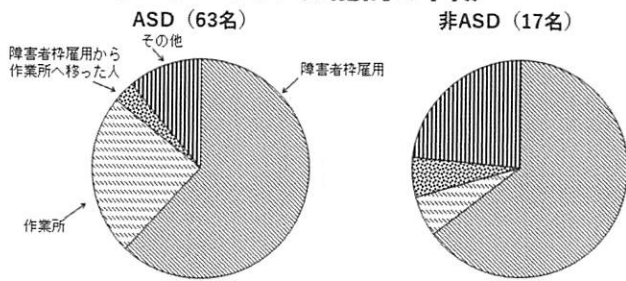
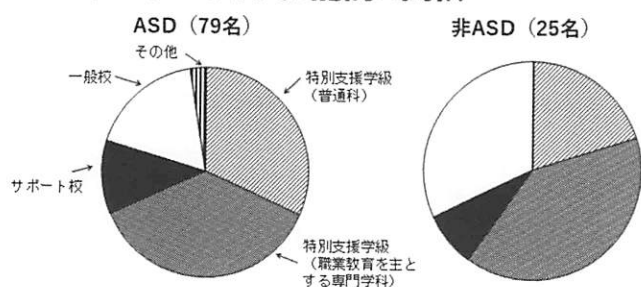


図 7

ボーダーライン知能例の高校



ASDでは、作業所通所が非ASDよりも多いです。大学進学者はASDでは二人います。

三 当事者の声

さて、アンケートを取って、当事者（本人）の声を聞いた結果です。小学校、中学校、高校のそれぞれの時期に分けて聞きました。アンケート項目は次の通りです。

【満足度】「楽しみ」、「嫌なこと」
 【学習】「授業」、「宿題」
 【QOL】「友達」、「先生」、「学校」
 (QOLはQuality of Life)
 就労に関するアンケート項目は次の通りです。

【満足度】「楽しみ」、「嫌なこと」
 「適正」
 【QOL】「話相手」、「相談相手」、「余暇」
 アンケートは四段階で評価して、自由記述もしてもらいました。

小学校での【満足度】については、「楽しみ」、楽しいことがあったかどうかを聞きました。ASD、非ASD共に特別支援学級の方が過ごしやすかったようで、満足度が高いです。通常学級に在籍したASDの方が「学校があまり好きではなかった」「音がうるさかった」と書いています。非ASDの方も「(通常学級に)二度と戻りたくない。つまらなかった」と書いています。
 小学校の【学習】は、ASD、

非ASD共に、ボーダーライン知能であると通常学級の「授業」に難しさがあります。特別支援学級では授業が分かるようになったようです。非ASDの方は通常学級で「宿題」はとても苦労したようです。特別支援学級に入って「その方がよかった」と回答しています。ASDの通常学級の方が「授業を全て理解するのが大変だった」「授業内容や宿題が難しく理解できなかった。母に聞いたり通級で頑張った」「転校後、特別支援学級で勉強しやすくなった」と書いています。

小学校の【QOL】については「友達」は、ASD、非ASD共に特別支援学級の方が満足度が高いです。通常学級では「いじめに遭うことがほとんどで、いい生活ではなかった」「図書室で本を読んでいた」とASDの方が書いています。そして、「先生」については、ASDの方は特別支援学級の方が満足度が高いです。非ASDは通常学級も通級も同じです。「わりと先生はよかった」という非ASDの方は多いです。放課後について、通常学級のASDの方は、友達と遊んだ方もいますが、それができない方もいます。特別支援学級の方が不満足は少ないです。一方、非ASDの方は、通常学級の方が「よかった」「友達遊びができた」と答えていて、特別支援学級に行ったらそれが少なくな

ったという声も聞かれました。

中学校の【満足度】についてはASDも非ASDも共に、通常学級の方は楽しいこと、よかったことがあまりなく、嫌だったことが多かったようです。特別支援学級はよかったということが結構多かったです。「通常学級には慣れなかったが、特別支援学級では充実していた」とASDの特別支援学級の方は書いています。

中学校の【学習】については。「授業」は、ASDも非ASDも共に通常学級にいた人は「分りにくかった」、特別支援学級に行ったら人は「分かるようになった」と答えています。「宿題」は、ASDも非ASDも共に、通常学級では「まあ、ほどほどよかった」という人もいますし、「嫌だった」「難しかった」という人もいます。特別支援学級に行ったら「よかった」という人が増えました。

中学校の【QOL】についてはASD、非ASD共に「先生」「学校」は特別支援学級の方が満足度が高いです。通常学級での「友達」は、ASDの方は困難ですが、非ASDの方は満足度が高いです。ASDの通常学級にいた方が「中二でいじめに遭い、中三で不登校になった」と書いています。ASDの特別支援学級にいる方が「よい先生に出会って、苦手なことへ挑戦する気持ちが湧いた」と書いています。放課後の過ごし方につ

いては、放課後をエンジョイする能力は、非ASDの方がASDの方より高いです。

就労の【満足度】についてです。

作業所に行っている人や障害者枠で企業就労している人がいます。ASDで障害者枠で就労している人は満足度が高いです。学生時代に「なんで僕はこういうふうになった」「人間ってこんなに優しさがないのですか」と語っていたのに、就労して自分が社会人として、背広を着て月給をもらっていると、自己達成感や自己肯定感をもつことができ、人生を悲観するような話がなくなりました。だから、就労はどれほど大事なことかと思えます。非ASDで障害者枠雇用の方も「まあまあ」と回答しています。作業所に行っているASDの方が「好きなことを仕事で制限されている。理解してほしい」と書いています。「適正」については、作業所に行っている方は満足度はそれほど高くありません。

就労の【QOL】についてです。

「話相手」は、作業所で働く方も障害者枠雇用で働く方ももっています。非ASDで就労している人は、そのところにストレスを感じている人が結構います。「相談相手」は、作業所で働く方は「いない」と感じている人がいます。障害者枠雇用の方が相談相手になつてくれる同僚、上司がいます。「余暇」の活動は、作業所の方は「な

い」という方々がいてなかなか難しいようですが、中には「友達と花火や温泉、映画に行きました」と書いている方もいました。

四 まとめ

ボーダーラインの方たちは、仕事をできる環境があれば立派に仕事をされています。そして、仕事それぞれの方たちの心身の支えになつていけると感じました。自分が満足できるような仕事に向けて、仕事に就くまで、生き生きと社会に出ていけるようにするためには、教育の中で何ができるのかということを考えていただく参考にしていただければと思います。

第四回都情研夏季研究大会

(多摩南ブロック大会)

日時：令和元年八月一日(木)

八時四十五分～十七時

会場：オリンパスホール八王子

(JR八王子駅南口直結)

内容：指導実践報告・記念講演

講師：長谷川 安佐子 先生

(新宿区教育委員会)

特別支援教育相談員)

渡辺 圭太郎 先生

(西東京市教育支援

アドバイザー)

《記念講演》

講師：田中 哲 先生

(子どもと家族のメンタル

クリニックやまねこ院長

山梨県心の発達総合支援

センター所長)

演題：特別支援教室に期待するも

の医療と学校教育の連携

を目標として

運営担当の多摩南ブロックを除く四地区の指導実践報告(一地区は中学校)を中心に、昨年度に引き続き、研究テーマ「情緒障害教育における障害特性に応じた自立活動について」特別支援教室等における児童・生徒のアセスメントと専門的な指導」について考えていきます。なお、詳細はホームページにてご確認の上、必ず事前申し込みをしてお参加ください。

第五十二回全国情緒障害教育研究協議会(宮城大会)案内

令和元年八月八日(木)・九日

(金)の二日間、宮城県仙台市青

葉区にあります「仙台国際センタ

ー」を会場に、全国情緒障害教育

研究協議会(宮城県特別支援教育

研究会自閉症・情緒障害教育専門

部全体会・研究協議会同時開催)

を開催いたします。大会のテーマ

は、「生きること・支えるもの・楽

しむこと ライフステージを見通

して学校教育を考えようみんな

でつなぐ・ここに目を向けるこ

とから始める情緒障害教育を」

です。

大会一日目は、文部科学省初等

中等教育局特別支援教育課特別支

援教育調査官による基調講演や、

当事者とその支援者による演奏、

そして、シンポジウム1「余暇活

動の楽しみ方」があります。

大会二日目は、二つの会場に分

かれて開催します。シンポジウム

2「幼児期から学校教育へ」と、

シンポジウム3「学校教育から社

会生活へ」の分科会があります。

大会一日目の八月八日は、豪華

な七夕飾りで有名な、仙台七夕祭

りの最終日でもあります。ぜひ多

くの方のご参加をお待ちしており

ます。

大会についての詳細は、全情研

のウェブページからご覧下さい。

(全情研事務局長 植草葉月)

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたら左記までお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当

各ブロック 広報係

世田谷区立明正小学校

(廣田智仁)

☎03・3415・5597